

僧 興 義

義 興 僧

殆んど一千年前、近江の國大津の名高い三井寺に、興義と云ふ博學の僧がゐた。繪の大家であつた。佛像、山水、花鳥を殆んど同じ程度に巧みに描いたが、魚を描く事が最も得意であつた。天氣の好い日で、佛事の暇のある時には、彼はいつも漁師を雇うて琵琶湖に行き、魚を痛めないやうに捕へさせて大きな鹽に放ち、その遊び廻るのを見て寫生した。繪を描いてから、勞りながら食物を與へて再び、——自分で湖水までもつて行つて、——放つてやるのがつねであつた。彼の魚の繪はたうとう名高くなつたので、人はそれを見に遠くから旅をして來た。しかし彼の凡ての魚の繪のうちで、最も不思議なのは、寫生ではなくて、夢の記憶から描いた物であつた。そのわけは、或日の事、彼が魚の遊ぶのを見るために、湖岸に坐つて居るうちに思はずまどろんで、水中の魚と遊んだ夢を見た。眼をさましてから、その夢の記憶が餘りに鮮明であつたので、彼はそれを描く事ができた、そしてお寺の自分の部屋の床の間にかけて置いたこの繪を、彼は『夢應の鯉魚』と呼んだ。

興義は、彼の魚の繪を一枚も賣る事を喜ばなかつた。山水の繪、鳥の繪、花の繪は喜んで、手放したが、彼はいつも、魚を殺したり喰べたりするやうな残酷な者には、生きた魚の繪は賣りた

くないと云つてゐた。そして彼の繪を買ひたがる人々は皆魚食の人々であつたから、彼等が如何程金を積んでも、彼はそれには迷はされなかつた。

或夏の事、興義は病氣になつた、それから一週間病んだあとで、物言ふ事も、動く事もできなくなつたので、彼は死んだと思はれた。しかし讀經など行はれたあとで、弟子達は體に幾分の温みのある事を發見して、暫らく埋葬を見合す事にして、その死骸らしく思はれる物のわきで、見張をする事に決した。同じ日の午後に、彼は突然蘇生した、そして見張の人々にかう云つて尋ねた、——

『私が人事不省になつてから、幾日になりますか』

『三日以上になります』一人の弟子が答へた。『いのちがお絶えになつたと思ひました、それで今朝日頃のお友達、檀家の人々がお寺に集まつておとむらひをいたしました。私達が式を行ひましたが、お體が全く冷たくないから、埋葬は見合せました、それで今さうした事を甚だ喜んでゐます』

興義は成程とうなづいてから、云つた、——

『誰でもよいから、すぐに平の助（たけのすけ）のうちに行つて貰ひたい、そこでは今、若い人達が宴會を開いて居る——（魚を喰べて、酒を飲んで居る）——それで、云つて貰ひたい、——「あるじは蘇生しました、どうか宴會を止めて、即刻來て下さいませんか、あなた方に珍らしい話をいたします

から」……同時に』——興義は續けて云つた——『助と兄弟達が、何をして居るか、見て来て貰ひたい、——私が云つた通り、宴會をしてゐないかどうか』

それから一人の弟子が直ちに平の助の家に行つて、助と弟の十郎が、家の子掃守かきと一緒に、丁度興義が云つた通り、宴を開いて居る事を見て驚いた。しかし、その使命を聞いて三人は、直ちに酒肴をそのままにして、寺へ急いだ。興義は床から座蒲團に移つてゐたが、三人を見て歓迎の微笑を浮べた、それから、暫らくお祝と御禮の言葉を交換したあとで、興義は助に云つた、——『これから二三お尋ねする事があるが、どうか聞かせて下さい。第一に、今日あなたは漁師の文四から魚を買ひませんでしたか』

興 『はい、買ひました』助は答へた——『しかしどうして御存じですか』

僧 『少し待つて下さい』僧は云つた。……『その漁師の文四が今日、籠の中に三尺程の長さの魚を入れて、お宅の門へ入つた。午後の未だ早い時分でしたが、丁度あなたと十郎様が碁を始めたところでした、——それから掃守が桃を喰べてゐながらその碁を見てゐました——さうでしたらう』

『その通りです』助と掃守は益々驚いて、一緒に叫んだ。

『それから掃守がその大きな魚を見て』興義は續いて云つた、『すぐにそれを買ふ事にした、それから代を拂ふ時に、文四に皿に入れた桃をいくつか與へて、酒を三杯飲ませてやりました。それから料理人を呼んだら、その人は魚を見て感心しました、それからあなたの命令で、それを贈なまにして、御馳走の用意をしました。……私の云つた通りぢやありませんか』

『さうです』助は答へた、『しかしあなた、今日私のうちであつた事をどうして御存じですか、實に驚きます。どうかこんな事がどうして分りましたか聞かして下さい』

『さあ、これからが私の話です』僧は云つた。『御承知の通り殆んど皆の人達は私を死んだと思ひました、——あなたも私のとむらひに来てくれましたね。しかし、三日前に私はそんなにひどく悪いとは思はなかつた、ただ弱つて、非常に熱いと思つたので、外へ出て少し涼まうと思つた。それから骨を折つて床から起き上つて、——杖にすがつて、——出かけたやうです。……事によればこれは想像かも知れない、しかしやがてその事は皆さん御自分で判断ができません、私はただあつた事を何でもその通りに述べるつもりです。私がうちからあかるい外へ出ると、全く軽くなつたやうな、——籠や網から逃げ出した鳥のやうに軽くなつたやうな氣がした。私は段々行くうちに湖水に達した、水は青くて綺麗だつたから、しきりに遊いで見たくなつた。着物を脱いで跳び込んで、そこら邊泳ぎ出した、それから、私は非常に早く、非常に巧みに遊げるので驚いた、——ところが實は、病氣の前は遊ぶ事も非常に下手であつた。……皆さんは馬鹿な夢物語だと思はれるだらうが——聽いて下さい。……私がこんなに新しい力が出て來たので不思議に思つて居るうちに、氣がついて見ると、私の下にも廻りにも綺麗な魚が澤山遊いでゐた、私は不意に幸福な魚が羨しくなつて來た、——どんなに人がよく遊げると云つたところで、魚のやうに、水の下で面白くは遊ばれないと思つた。丁度その時、甚だ大きな魚が私の目の前の水面に頭を上げて、人間の聲で私にかう云つて話しかけた、——「あなたの願は何でもなく叶ひます、

暫らくそこでお待ち下さい」それから、その魚は下の方へ行つて見えなくなつた、そこで私は待つてゐた。暫らくして湖水の底から、——私に物を云つたあの大きな魚の背中に乗つて、——王公のやうな冠と禮服を着けた人が浮かび上つて来て、私に云つた、——「暫らく魚の境遇になつて見たいとの御身の願を知しめされた龍宮王から使をもつて来た。御身は多くの魚の生命を救つて、生物への同情をいつも示して居るから、神は今御身に水界の樂みを得させるために黄金の鯉の服を授け下さる。しかし御身は魚を喰べたり、又魚でつくつた食物を喰べたりしないやうに注意せねばならない、——どんなによい香がしても、——それから漁師へ捕へられないやうに、又どうかして體からだを害をする事のないやうにやはり注意せねばならない」かう云つて、その使者と魚は下の方へ行つて、深い水の中に消え失せた。私は自分を顧みると、私の全身が金のやうに輝く鱗で包まれてゐた、——私には鱧があつた、——私は實際黄金の鯉と化して居る事に氣がついた。それから、私の好きなところ、どこへでも游げる事が分つた。

『それから、私が遊びで、澤山の各所を訪れたらしい。「ここで、原文には、近江八景を説明した歌のやうな文句が入れてある」時々私は青い水の面で躍る日光を見たり、或は風から遮ぎられた靜かな水面に反映する山や木の美しい影を見たりしただけで満足した。……私は殊に島の岸——沖津島か竹生島か、どちらかの——岸が赤い壁のやうに水の中に映つてゐたのを覚えて居る。……時々私は岸に餘り近づいたので、通つて行く人の顔を見たり、聲を聞いたりする事ができた、時々私は水の上に限つてゐて、近づいて来る櫂の音に驚かされた事もある。夜になれば、美しい月

の眺めがあつた、しかし私は片瀬の漁舟のかがり火の近づいて来るには幾度も驚かされた。天氣の悪い時には、下の方へ、——ずつと下の方へ、——一千尺も、——行つて湖の底で遊ぶ事にした。しかしこんな風に二三日面白く遊び廻つてゐたあとで、私は非常に空腹になつて来た、それで私は何か喰べる物をさがさうと思つて、この近所へ歸つて来た。丁度その時漁師の文四が釣をしてゐた、そして私は水の中に垂れてゐた鉤に近づいた。それには何か餌がついてゐて、よい香がした。私は同時に龍宮王の警告を想ひ出して、獨り言を云ひながら、遊び去つた。——「どうあつても魚の入れである食物は喰べてはならない」それでも私の飢は非常に烈しくなつて来たので、私は誘惑に勝つ事ができなくなつた、それで又鉤のところへ遊びかへつて、考へた。——「たとへ、文四が私を捕へても、私に害を加へる事はあるまい、——古い友達だから」私は鉤から餌を外す事はできなかつた、しかし餌の好い香は到底私が辛抱できない程であつた、それで私はがぶりと全部を一呑みにした。さうするとすぐに、文四は糸を引いて、私を捕へた。私は彼に向つて叫んだ、「何をするんだ、——痛いぢやないか」——しかし彼には聞えなかつたらしい、直ちに私の頸に糸を通した。それから籠の中へ私を投げ入れて、お宅へ持つて行つたのです。そこで籠を開いた時、あなたと十郎様が南の部屋で碁を打つてゐて、それを掃守が——桃を喰べながら——見物して居るのが見えた。そのうちに皆さんが私を見に縁側へ出て来て、そんな大きな魚を見て喜びましたね。私はできるだけ大聲で皆さんに、——「私は魚ぢやない、——興義だ、——僧興義だ、どうか寺へかへしてくれ」と叫んだが、皆さんが喜んで手をたたいて私の言葉には頓着しな

かつた。それから料理人は臺所へもつて行つて、荒々しく俎板まなこの上に私を投げ出したが、そこには恐ろしく鋭い庖丁が置いてあつた。左の手で、彼は私を押へて、右の手で庖丁を取り上げた、——そして私は彼に叫んだ、——「どうしてそんなに残酷に私を殺すのだ。私は佛の弟子だ、——助けてくれ」しかし同時に私はその庖丁で二つに割られるのを——非常な痛さと共に——覺えた、——そしてその時突然眼がさめた、そしてこの寺に歸つてゐた』

僧がこの通り話を終つた時、兄弟は不思議に思つた、そして助は云つた、——『今から想へば、なる程私達が見て居る間、魚の顎が始終動いてゐた、しかし聲は聞えなかつた。……それではあの魚の残りは湖水に捨てるやうに、家へ使を出さねばならない』

興義はすぐに病氣が直つた、そしてそれから又澤山の繪を描いた。死後餘程たつてから、彼の魚の繪が或時湖水に偶然落ちた事があつた、すると魚の形がその地の絹や紙から直ちに離れて遊ぎ去つたと傳へられて居る。

(田部隆次譯)

The Story of Kogi the Priest. (A Japanese Miscellany.)